アイヌ語地名で歩く美瑛・上富良野（十勝岳ジオパークエリア）　2022-11-15

私たちの住んでいる土地にも多くのアイヌ語地名が残されています。今回はそのうち旭川方面から富良野方面へ南下する際に行き会う主なアイヌ語地名を一つずつ考察してみます。皆さんが手にすることのできる諸書にある既存の解釈を踏まえた上で、首肯できないところに新解釈を施してみたものですので参考にしてください。古くからここを生活圏としていたアイヌの人たちが目にしていた、移住者による開拓以前の原風景がより身近に感じられるようになればと思います。　山谷圭司

1	ペペッ	辺別川　べべつがわ	pe･pet　水・川	旭川市教育委員会の公式見解
			pet･pet　川・川	別解「枝川の多い川」の意

（歴史）この川は現在、美瑛川の支流扱いされています。ところがアイヌ時代にはペペッの方が本流で、ピイェ（美瑛川）がその支流と認識されていたようです。ペペツの名が地図上に現れ始めるのは 19 世紀の初めころ（文化・文政期）で、間宮林蔵の調査によるものでしたが、これらの地図では主にペペツの方が本流扱いになっています。

その後、安政 4 年(1857)、この地方を調査して、その記録を残しているのは松田市太郎です。ここにもペペツ・ピエの名が出てきますが、どちらが本支流であるかは記されていません。同年の松浦武四郎の記録ではペペツが本流で、現美瑛町旭地区でピエが分かれると聞き書きしています。武四郎を案内した村長（コタンコロクル）のクーチンコロはペペツ筋に住んでいたということですが、その場所は旭川市神楽見本林あたり、つまりペペツ筋とは今の美瑛川筋だったのです。

さらに古い話になりますが、十勝の札内や芽室のアイヌの伝承に、自分たちの先祖はこのペペツからの移住であったという記録なども残っていて、ペペツはアイヌ世界では広く知られていた地名だったようです。

このペペツ本流認識が、その後ピイェ本流認識に変わったのは明治以降、和人によるものと思われますが、その時期、理由については今後のより詳しい文献調査が待たれます。今はその流長や水量が本支流の判断材料になるようですが、アイヌ時代にはそうした数字上のデータよりも、どちらが生活や信仰に大切かによっても判断されていたようです。水が悪く漁も少ない美瑛川と、水質のよい辺別川、アイヌにとってどちらの川が本流として尊ばれていたのでしょうか。

ちなみに今の JR 富良野線、西神楽駅は昭和 17 年まで辺別駅と呼ばれていました。

（地名解）通説になっているのはペペツ＝「水の川」説ですが、すぐには得心できないものです。川に水が流れているのは当たり前だからです。しかしアイヌ語地名ではよく見られるのですが、近くの川と区別するためにそれぞれの特徴から名づけることがあったようです。ここでペペツと対比されるのはピイェで、こちらは「脂ぎった川」とされています。今は透明ですが、往時は上流の硫黄山から溶けだした成分がこの川を白く濁らせていたようで、それを脂の多い煮汁のように見ていたのかもしれません。その後の硫黄採掘にともない、見た目には清流に変わってきたものと考えられます。「脂川」の反対に、水質のよい川をあえて「水川」と呼んでいたのでしょうか。

しかしここで引っかかることがあります。この二つの川が今の美瑛町旭で合流し、旭川市曙で忠別川に落ちる間（直線距離でも 12～3 ㎞）もペペツと呼ばれていたわけですが、脂ぎった川である美瑛川を合してもなお pe･pet＝「水の川」と言えるでしょうか。

そこでもう一度考えたいのは pet･pet=「川・川」説です。旭川市の公式見解には『(水川）小川がいくつも集まって川をつくっているところ』という注釈があります。ならば「水・川」ではなく「川・川」が原意に近いのではないでしょうか。千歳市に美々（ビビ）という地名がありますが、ここでも pet･pet=「川・川」が語源だとされています。

（渡渉地点）今の旭川付近に住んでいたペニウンクル（上川衆）が美瑛・富良野方面に向かう際、辺別川を渡河する地点はほぼ決まっていたと考えられます。水深が浅く流れも緩いところなら、渡渉距離は長くなりますが、川が幾筋にも分かれる所だったでしょう。こうした所を鹿の群れも、またアイヌも利用していたと考えられます。

松浦竹四郎は戊午日誌にビビ（ビエイ）とベベツの合流点から 20 丁ばかり（2 ㎞ほど）上でベベツを渉ったと書いています。この通りだとすると旧聖和小学校の 1 ㎞ほど上流になりますが、野帳にはこの距離は書いてないので、あくまでこの距離数は戊午日誌の編集時に大雑把な推測を差し入れたものでしょう。

明治の地図を見ると今の旭橋の下流、美瑛川との合流点から 7～800m 付近、旭農場開設当時に渡船場があった付近には枝川が記されていて、このあたりをアイヌが武四郎らと渡っていた地点ではないかと考えています。ここには今も水難除けの金毘羅社が祀られています。

2	ポロナイ	北瑛川　ほくえいがわ	poro･nay　大きい・川	北海道環境生活部の公式見解
			poro･nay　御・川	別解「大切な川」の意

（比定地）この川の名は松田市太郎、松浦武四郎の記録に出てくるのですが、明治以降の地図には載せられず、その場所については長く見解が一致していませんでした。候補地と

して挙げられていたのは今の夕張川、美田川、瑠辺蘂川などでしたが、武四郎の記録を精査してみると北瑛川である可能性がもっとも高く、今後はこれが認知されていくことと思います。

（地名解）各地にポロ・ナイ、ポロ・ベツ、ポロ・シリなどの地名があり、多くの地名解ではこのポロに、大きい～、親である～などの解を施しています。しかし小さな川や山でもポロ～と命名されている例が多いことから、もっと別の意味もあったと考えるのが自然です。一つは命名するだけの特徴的なものがなく、しかし生活上、信仰上大切な川や山をポロ～と呼んでいたのではないかということです。例えば地元の人が馴染んでいる山を敬愛して「お山」というだけで通じるような感じでしょうか。

（宿営地）川の渡渉地点がほぼ決まっていたように、野営も当てずっぽうの場所ではなく、勝手知ったる利便のいい場所、常宿地があったと考えられます。このポロナイも武四郎一行が泊ったところで、ここに周辺のほかの川と異なる、命名するほどの特徴がなくても、お世話になる場所としてポロナイと尊称していたのではないでしょうか。

3	**オキキネウシ**	置杵牛川　おききねうしがわ	o-kikinni-us-i=川尻にエゾノウワミズザクラ（またはナナカマド）の多い所	
	オシキナウシ		o-sikina-us-i=川尻に蒲の多い所	
	オキケナシ		o-ki-kenasi=川尻が草原性の木原	?
			o-kene-us-i=川尻にハンノキが多い所	?

（表記）松田市太郎と松浦武四郎、および明治 24 年の殖民地選定図はヲキケナシと表記していて、明治 30 年前後の地図ではオシキナウシとオキキニウシが混在しています。o~とは川尻、つまり美瑛川との合流点を指すものと考えられ、o-kene-us-i=川尻にハンノキが多い所、o-sikina-us-i=川尻に蒲の多い所、o-kikinni-us-i=川尻にエゾノウワミズザクラ（またはナナカマド）の多い所、等々の解釈が考えられてきました。しかしハンノキ説ならオケヌシあるいはオケネウシと発音されたと思われ、ヲキケナシとするにはやや難があるように思います。

仮にヲキケナシにハンノキの意味があったとしても、後にここで植生の更新があり蒲原になったり、エゾノウワミズザクラ（またはナナカマド）の林に変わったことが考えられます。もう一つは案内のアイヌによって別称があったかもしれません。

（地名解）いずれにしろこの川はオキキニウシに統一され、置杵牛の漢字が当てられることになりました。o-kikinni-us-i=川尻にエゾノウワミズザクラ（またはナナカマド）というわけです。アイヌ語では不思議なことにこのバラ科の 2 樹種が同名で呼ばれていた

ということです。ただこの 2 種は、ともに臭い匂いのある木で魔除けになったと言います。今の JA 美瑛の選果場横、美瑛川と置杵牛川との合流点の川原の地名が、ここに流入する川名にもなったようです。

4	ピイェ	美瑛川　びえいがわ	piye　脂・(川)	北海道環境生活部の公式見解

(表記) 松浦武四郎はヒエヘツ、ビエベツと書き残していますが、ほとんどの記録ではたんにヒエ、ピエとされていて、こちらが一般的だったと思われます。この漢字表記ですが美英、美碘などとも書かれていましたが、明治 20 年代後半に美瑛に固定されていったようです。昭和 34 年の美瑛町史にある明治 32 年早川悦太郎命名説は、平成 12 年の美瑛町百年史で訂正されています。

(地名解) ペペツのところで前述しましたが、この川の上流、十勝岳には大量の硫黄が堆積されていて、その成分が溶け出して美瑛川は白濁していて、それで脂川という意のピイェと呼ばれていたようです。それが明治後期以降の硫黄採掘によって徐々に透明化していき、見た目はもう脂川ではなくなっています。ただし「青い池」で分かるように水質は魚に取って今も好環境ではないと思われます。

5	ルードラシナイ	憩川　いこいがわ	ru･turasi･nay　径･がそれに沿って上る･川

(地名解) 議論の余地のない解釈ができると思います。この反対語はルペシペ/ルペシペナイ=道がそれに沿って下る者/川になります。

　ただ一つ疑問が残るのは、これではアイヌが上り径と下り径を歩き分けていたのかということです。例えばこの川の西方に瑠辺蘂川（ルペシペ）があり、この川は美瑛川と芦別方面の空知川本流の連絡路だったと考えられますが、径が沿って下っている川という解釈では、空知川から美瑛方面に向かうときにしか当てはまりませんので、今後の課題になるかと思います。

(歴史) 松浦武四郎の記録にこの地名は残されていませんが、この川を左に見て高台を南下したようですし、この川沿いにその後鉄道が敷設されました。もともとは鹿の季節移動の経路だったと考えています。

6	ピパウシ	美馬牛川 びばうしがわ	pipa-us-i カラス貝･多い･川	北海道環境生活部の見解

(地名解) この地名は各地に見られます。アイヌ語のピパは沼貝、カラス貝、川貝などといろいろ訳されていますが、沼貝、川貝は俗称で、正式な種名はカラスガイ、またはカワ

シンジュガイとしたほうが分かりやすいと思います。これらの貝は食用になっただけでなく、ヒエやアワの刈り取りにも使われていたということで、アイヌの生活には貴重だったので地名になったものと考えられます。

今の美馬牛川流域にはもうカラス貝は確認されていないということですが、それを探索するのも新しい楽しみ方かもしれません。（カワシンジュガイは生存？）

7	エホロカアンペツ	江幌完別川 えほろかんべつがわ	e-horka-an-pet 頭が後ろ向きである川

（地名解）これも各地に見られ、解釈もほぼ一致している地名です。川をさかのぼれば、普通、山に向かって行くものですが、中には逆に山から離れていく川もあります。それで頭＝（川の）源頭が後ろ向きという命名になりました。雨竜川上流の幌加内、空知川上流のホロカソラプチ、十勝川上流のホロカ十勝川なども同様の意味です。

ちなみにこの川の支流にドラシ･エホロカアンベツ＝（径がそれに沿って）登っている江幌完別川があります。旭川方面との往来に美瑛川支流の瑠辺蘂川と結ばれていたものと考えられます。またもう一つ、江花地区にエ･パナ・オマ･エホロカアンベツ、略されてエパナマエホロカアンベツ川があります。これは頭が下流の方にある江幌完別川という意味になりますが、エホロカンベツ川自体がすでに逆さ向きの川ですので、その川の支流がさらに逆さ向きになっているという年の念の入った意味になります。

8	フラヌ（イ）	富良野川　ふらのがわ	hura･nu･(i) 臭い･を持つ･(所)

（地名解）「フラ･ヌ＝臭い･を持つ」という解釈は定説ですが、この臭いは何だったのか、今までそれは十勝岳の硫黄に起因するものとされてきました。しかし硫黄の臭いは美瑛川でも強かったのではないでしょうか。ここでの新解釈は硫黄に加えて富良野川の泥炭地の植物性の腐臭もあったのではないかということです。あまり知られていませんが、長万部郊外にフラノベツという川があります。ここの上流には火山はありませんが、河口付近には泥炭地があったようです。また根室の方にはフラルモイという地名があり、これは昆布などの腐臭がひどい入江だったということです。そうした例を見るとフラヌをこれまでの硫黄臭説一辺倒では済ませられないかと思います。

またこの地名が、フラノペツとかフラナイとかの川名ではなく、地域名であることも考えてみるべきでしょう。富良野川の中下流は大正の排水工事前は大湿地帯で尻無し川になっていました。～ペツ、～ナイという場合、明確な流路のある河川に名づけられていましたが、フラヌ(イ)はそうした川とは見られていなかったようです。

ちなみにこの川の上流にはピリカ富良野川があります。富良野川水系なのに水質がピリカ（良い、美しい）という支流があります。このような主意を打ち消す形容句のつく命名がアイヌ語地名には目につきます（ペペルイの項参照）。

9	レリケウシナイ	（日の出地区の）中の沢？	rewke・usi・nay　曲がっている沢？
			rerke・usi・nay　山の向こう側にある沢？

（位置）松浦武四郎一行の宿営地だったことから、これまで様々な比定地が挙げられていますが、共通するのは上富良野町日の出山付近だったろうということです。ここでは武四郎記録にあるフシコペツ（古川）から 10 丁ほど手前だったということで、日の出山南面を流れていた細流をレリケウシナイと考えています。フシコベツはヌプカクシフラヌイの旧河道で、上富良野高校から島津公園方向に向かっていたということが分かっていますので、そこからの逆算と日当たりのいい南向きだったという記述から割り出してみたものです。明治以降の地図や記録には現れない忘れられた沢名です。

（地名解）武四郎のカタカナ表記から二通りの地名解が考えられますが、その語感と位置からは rerke・usi・nay 説の可能性が高いように思います。rewke・usi・nay 説に関しては、その流路がかつてどのようなものだったか確認できないのが難点になります。

（和名）名前も確認できない細流ですが、この上流に中の沢貯水池があることから中の沢と呼ばれていた可能性があります。ただし中の沢は隣の旭野地区にもあり、この日の出地区の中の沢と混同しないように要注意です。

10	ヌッカクシフラヌ(イ)	ヌッカクシ富良野川	nup・ka・kus・huranu(i) 野・上・通る・富良野川

（地名解）この地名解釈には議論はありません。富良野川が湿地帯を流れるのに反し、その支流である本川は小高い所を流れているという意味になります。源頭の十勝岳温泉上流の噴気孔帯はヌッカクシ火口、旧噴火口、安政火口などと呼ばれ、統一された呼称はありませんでしたが、安政時代にここが噴火した証拠はなく、また旧噴火口は大正火口を新噴火口とした時の呼称で、その後、昭和に噴火した火口からすれば大正火口も旧噴火口になるわけで正確とは言えません。長すぎるのが難ですが「ヌッカクシ富良野川源頭噴気孔帯」、略してヌッカクシ火口（?）がいくらか無難かと思います。

（別称）ちなみに松浦武四郎はこの川名にイワヲペツ＝硫黄川という別称を記録しています。日本語からの借用で、硫黄はすでにアイヌ語にもなっていたようです。また殖民地選定報文にヌップタフシコフラヌイ＝nup・ta・husko・huranui=～旧富良野川？なる地名が出ていますが、ヌップカクシフラヌイの聞き誤りと考えるべきでしょうか。

11	ポロペポツナイ	ホロベツナイ川	poro・petpo・ot・nay 大きい方の・小川・おびただしい・川

（地名解）アイヌ語の原音を正確にカタカナ表記することはなかなか難しく、また一次史料を書き写していくうちに、さらに間違いが重なることがあります。このホロベツナイもポロペポツナイを誤写したことによる意味の通らないアイヌ語地名で、今後正し

ていった方がいいと思います。このポロペポツナイとペアで、下流にポンペポツナイがありました。小さい方の（子である方の）ペポツナイという意味ですが、その後の農地整備で今は消失してしまったようです。

12	ペペルイ	ペペルイ川	pe･pe･ruy(i)　水たまり（湧水池）・はなはだ多い・所

（地名解）この川もフラヌイと同じく、～ペツ、～ナイのような川名でないのは、やはり下流域が湿地帯で流路が判然としなかったからでしょうか。～ルイは激しいとか、甚だしく多いと言った意味と考えられます。前半のペペを pet･pet（川川＝衆水）と考えるか、pe･pe（水水=水たまり、湧水池）ととらえるかが問題になります。この川には鳥沼（チカプントー）や魚沼という意味のチェップントーなどが流入していたところから、ここでは pe･pe･ruy（i）=水たまりや湧水地のとても多い川といった意味ととらえておくことにします。

　またこの川の上流にサッテクペペルイ＝sattek･peperui＝夏痩せする（水枯れする）ペペルイという支流があります。水の豊富なペペルイの支流なのに、ここでは水流が岩石の下に伏流していることからの命名でしょう。松浦武四郎が十勝越えの登路として記録してくれたので、今もその経路をたどることができます。

（別称）明治中期の殖民地選定報文にはナムワッカピウカ＝nam･wakka･piwka＝冷たい水の石川原とあり、これはペペルイの異称だったと思われます。冷たい水＝湧水ということからペペルイ＝水水説に有利かと考えられます。

13	オプタテシケ	十勝岳連峰	op･ta･atte･usike　槍が･そこで･立っている･所
			op･ta･teshke　槍が･そこで･はね返った、それた、滑る etc.

（地名解）日本神話の高千穂の峰のような創世神話や、雌阿寒岳と十勝岳の嫉妬による壮大な夫婦げんか説話が残っていて、遠く樺太や千島にも聞こえた有名な山名です。オプ･タ～＝op･ta～＝槍が･そこで～まではほぼ諸説が一致するのですが、後半部が不分明なままです。噴火口を槍の刺さった跡だと見立てるなら、旧説ではその跡が残らないわけで、あえて新説を掲げました。atte には立てかける、下ろすなどの意味がありますが、煙を上げる＝sipuya･atte という使われ方もあり、また火柱＝sune･op という言い回しもあったようで、噴煙を槍に見立てての地名だったのではないでしょうか。

（別称）十勝側ではケンルニ＝kenru･uni=(尊い)家?、ポロシリ＝poro･siri=（尊い)お山などとも尊称されていたようです。

（範囲）今日では、地図上のオプタテシケは十勝岳連峰北東端の 2013m 峰だけになっていますが、つい 2，30 年前までの地理院図では美瑛岳からコスマヌプリまでにオプタテシケと記載されていて単独峰ではありませんでした。またもっと昔、明治の地図にまで

さかのぼれば十勝岳連峰全体が西オプタテシケ、大雪山に東オプタテシケの名称がありました。槍を立てている山=噴煙を立ち昇らせていたのは十勝岳だけではなく、旭岳も同様で、その噴火の記憶はアイヌの伝承やウポポ（歌謡）にも残されています。

そうした由緒があるオプタテシケという山域名とは反対に、大雪山という呼称がいつ誰によって、またどういう根拠で命名されたのか、明治 20 年代から 30 年代にかけて、当時のアイヌ語の権威であり漢学者でもあった永田方正説もありますが未だに決定的ではありません。大雪山の読み方は公式にはダイセツザン、一般的にはタイセツザンですが、その命名由来も曖昧なままです。

世界的に各地の地名を先住者の旧名、つまり本名に復そうという動きが見られます。エベレストがチョモランマに、マッキンレーがディナリに、エアーズロックがウルルなどの例が知られていますが、アイヌ語地名が北海道遺産になった今でもオプタテシケを大雪山と併称しようという動きは見られないのは残念なことです。

少なくとも十勝岳とか十勝岳連峰は、この山域がまるで十勝地方にあるような印象を与える難もあることから、オプタテシケ連峰と呼ぶことに正当性があるものと考えています。

14	カムイメットクヌプリ	神女徳岳、富良野岳	kamui・metot・tuk・nupuri　神・奥にそびえる山

（地名解）ペナクシホロカメットクヌプリ（下ホロカメットク山）、パナクシホロカメットクヌプリ（境山。今の上ホロカメットク山ではないと推測）が近くに並んでいます。この三山に共通する～メットクヌプリの～メットクは metot・tuk=「深山幽谷、奥山に突出している」と解釈するのが穏当のように思われます。そのうちカムイメットクにカムイという特別な尊称が付けられていた理由は何だったのでしょうか。

（位置）奥山というからには今の上富良野側からの命名でないように思います。空知川本流、十勝川本流を遡ってみた方が、この三山は確かに奥の山になるからです。明治 34 年に中央高地初の一等三角点が埋設され、その点名が「神女徳岳」でした。案内のアイヌから聞いた山名と思われますので、今の富良野岳の原名の一つがカムイメットクヌプリだったと考えられます。

（別称）この山の名称を松浦武四郎はオッチシペンサイウシペ＝鞍部の上手側にいつもいる者(？)という別称を記録しています。彼を案内した石狩上川のアイヌの呼称だったようです。

（和名）神女徳岳の呼称は定着しなかったようで、大正年間には中央高地を集中、網羅的に研究した小泉秀夫が「上富良野岳」と新称しましたが、最終的には大正後期以降、北大山岳部での呼称「富良野岳」が一般化して地理院地図にも採用されるようになりました。

＊「十勝岳ジオパーク構想マップ」に書き込み

トカチルウチシとそのアイヌ語地名　美瑛町・上富良野町管内

2019-08　山谷圭司